

方針 6 歌う喜びを出発点に、いのちの輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を発展させ教育・学習活動をすすめる、21世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

〔教育・学習活動〕

全国合唱講習会は、西日本が広島市で、東日本が東京都で、それぞれ110人余の参加で行われた。祭典合同曲を講習曲に取り上げて祭典イメージを広げ、大合唱で歌う喜びも深めた。また、西では猪原龍吉氏による交響曲「炎の歌」より「石」の思いの深い合唱指導は感銘を呼び、東では岩本達明氏の楽しく的確な合唱指導を体感した。これらの合唱講習会の成果をさらに推し進めるためには、歌い手との学びあいも含め、指揮者・指導者の一層の努力が不可欠である。

全国指揮・合唱指導講習会は松本市で90人余の参加で行われた。従来、「教育講習会」と呼んでいたが今年度から「指揮・合唱指導講習会」とし、「合唱指導法」という認識を高めて指揮者・指導者だけではなく歌い手としても参加して学び合おうと、指揮法特別講師に梅田俊明氏、合唱特別講師に本山秀毅氏を招いて事前の準備も含めとりくみを強めた。指揮課題曲としてひろしま祭典合唱曲集を使い、全国合同合唱への参加、各地、各合唱団での練習、演奏の成功につなげた。また、第20回を記念して成果発表音楽会を開き、好評であった。今後さらに運動理念の学習や、声楽講座のあり方などの検討を進めながら、継続的に受講者の参加と内容を高めていきたい。

指揮者・合唱指導者会議は、当面登録活動を進めることにしたが不十分に終わった。

2005年日本のうたごえ合唱団が138人で結成され、原水爆禁止世界大会長崎のつどい・文化の夕べ、ひろしま祭典・音楽会での出演、名古屋での新春合宿、東京・大阪・長崎での練習会、などの活動が展開された。客演指揮に浅井敬壹氏を迎えて大きな刺激を得た。うたごえ運動の音楽創造の一つの到達を示すと共に、参加団員相互の交流と体験が各地での演奏創造の励みとなっている。2006年度合唱団の募集も行われ112人で結成、活動が開始されている。

北海道、九州ではブロックとしての合唱講習会が継続してとりくまれ、静岡ではうたごえ協議会主催で連続講座が開催されるなど、ブロックや協議会の連帯したとりくみとして祭典参加や音楽創造で成果を上げている。三多摩青年合唱団ではオペラ「森は生きている」を研究生修了音楽会で上演することを打ち出し、インターネットなどでもよびかけ、高校生、大学生、保育士、労働組合書記長など2桁の青年が研究生に参加している。また関西合唱団の日曜講座も新しい音楽家とのつながりを含め学習活動として学ぶところは大きい。

60周年を迎えるうたごえ運動のすぐれた経験を受け継ぎ、国内外のすぐれた音楽に学び、創造活動、運動理念の両面での学習教育活動を充実させ、新たなリーダーを生みだしていくことは運動の発展にとって不可欠である。

方針 7 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、21世紀をになう青年をたくさん迎える。

〔次代を担う青年の活動〕

歌いたい、学びたい、つながりたい、働きたい、平和な未来で生きたい...、青年自らの要求の高まりのなかで、青年のうたごえは活発に活動している。

東京では、分野、運動の枠を越えて青年たちが恒常的に交流し、中央メーデーで青年のひろばを実現したり、原水爆禁止世界大会の青年企画を作る中心になるなどの動きが活発になった。兵庫では平和と九条をテーマにしたピースフェスタを2000人を超える参加者で成功させるなど、その中でうたごえにかかわる青年が重要な役割を果たしている。愛知では青年のうたごえが独自のコンサートを成功させた。各地の祭典や、交流会などで青年企画が実現している。

全国青年交流会は、神戸で関西ブロック交流会と共催の形で開催され（71人中青年39人参加）、その中で初めて青年の合唱発表交流会が行われ全国推薦もできた。

ひろしま祭典の青年合同では今年も青年の創作曲が歌われ、この間の音楽づくりの成果をさらに発展させて来た。創作ダンスが披露されたのも特筆される。開催地への事前のアプローチなどでは課題も残したが、今後も地域ブロックを単位に連帯していきたい。

青年学生部員が青年のうたごえのネットワークの中心として一定の役割を果たし、うたごえ新聞の「青年欄」も集団で紙面づくりを試みるなど、新たな展開を見せている。

現在の青年が、運動の中心的な担い手となって活動し、さらに新しい青年を大量に迎え入れるためにも、青年向けの教育・学習活動の充実は重要である。各合唱団の研究生活動を充実させる一方で、協議会単位での学びの場を考えていく必要がある。また、さまざまな講習会に青年を意識的に送り出すとりくみも強めたい。

06年、初めて開催される「全国青年のうたごえ祭典 in Tokyo」フォルテ大ききうたえ」にむけて、準備が始まっている。

方針 8 サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

〔団員拡大、サークル建設、協議会確立と加盟を増やす〕

歌うこと、踊ること、自らの思いを表現したいとうたごえの輪の中に加わる人が増えている。

うたごえ喫茶では、常に3桁の参加者で盛況なところも少なくない。東京の年金者文化祭には10数団体の合唱グループが出演しているなど、年金者運動や女性運動などでは、各地にサークル・合唱団が生まれている。東京・足立ピースフラワー合唱団では地域に根づいた活動を旺盛に展開する中で大きく団員を増やしている。歌いたい要求を機敏につかみ、協力共同の関係を強め、サークル建設、協議会強化につなげる意識的なとりくみが求められる。

ブロックの連帯活動は、各県の協議会の活性化、協議会がない県などで新たな運動をつくる上で大切な役割を果たしている。祭典を持ち回りで開催している北海道、九州では、その開催地のうたごえが大いに力を発揮すると共に、連帯のとりくみが全国祭典の参加運動とも結び前進し、九州では新たな加盟団体を生んでいる。東北は20数年ぶりに青森で

の交流会開催を決めた。

産業別協議会があるところは祭典、合唱創作発表会が全国規模で開催され、参加者を励ましている。

一方で、歌いたい、表現したい要求はあるがリーダーや伴奏者がいなくてサークル化ができない状況も見られる。地域、職場、学園にサークル・合唱団を組織すること、そのためのリーダーづくりは急務である。

地域や産業別の祭典や合唱発表会には参加しているが全国協議会に加盟していないサークル・合唱団が未だ少なくない。これらの団体が全国協議会に加盟することで、うたごえ運動はさらに全国的な影響力をひろげ、その団体の発展にとっても大きな力になる。一番身近な仲間を迎え入れながら、運動の基盤であるサークル・合唱団建設、加盟促進を60周年を迎える運動の柱として位置づけたい。

うたごえ新聞読者、季刊「日本のうたごえ」読者拡大

創刊50周年を迎えたうたごえ新聞は、総会方針の「創刊50周年レセプションの4月10日までに新読者1000人を迎える」ことを、全国の大運動で達成した。常任委員会の深い決意と、運動にふさわしい体制、財政措置をとり、ニュースも連続して発行するなかで、各地で読者拡大の先頭に立つ人が生まれ、短期間で達成できたことの意義は大きい。

この教訓をいかし、担当者任せにせず、読者とのつながりを密にしたとりくみが求められている。

今、うたごえが大いに注目され、さまざまな分野で共同のとりくみが広まっているとき、音楽文化ジャーナルとしてのうたごえ新聞が果たす役割は大きい。情勢と運動の規模にふさわしい読者数を確立するとりくみが求められている。

季刊「日本のうたごえ」は独自のとりくみの弱さもあり微増にとどまっている。今一度、季刊「日本のうたごえ」の位置づけを明確にし、「学ぶ」ことを大切にしながら会員全員の購読を追求する必要がある。